

優秀賞

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「本当の強さ」

富山県立高岡高等学校2年 宗田千奈

手足の短い巨大な銅像が照らされた瞬間、私の目はテレビ画面に引き付けられた。その銅像の前を大勢の人が行進していく。今年のオリンピックの開会式の様子である。車椅子の選手、義足の選手、手話で話す選手。誰もが自信に満ちた幸せそうに輝く笑顔だ。そしてその笑顔を見たとき、私に本当の強さを教えてくれた女の子の笑顔を思い出した。

私は九年前に水泳教室で一人の女の子と友達になった。優しくて笑顔が素敵な彼女のこと大好きだった。だが私は彼女の笑い声も、私の名前を呼ぶ声も一度も聞いたことが無い。なぜなら彼女は聴覚障害を持っていたからだ。初めは彼女の言いたいことが分からず、とにかくニコニコしていた。言いたいことは分からないけれど、私はあなたが好きだよと伝えたかったからだ。ビート板に指で文字を書いて話もした。そのうち、微妙な顔の動きや表情の変化を見るだけで、二人で笑いあったり、励ましあったり出来るようになった。それでも、もっともっと知りたくて、伝えたくて、私は手話を覚え始めた。私にとって彼女の障害は大きな問題ではなかった。彼女は彼女、大切な友達だった。

だが、そんな私たちに対する周囲の目は冷たかった。誰もが私たちを避けるようになり、こんな言葉を聞いた。

「何であの人喋れんが？」

この言葉とあの冷たい目は、今でも忘れられない。純粹に声を発することが出来ない理由を問うているのではない。そこには差別があった。私は、初めて知った差別の底深い冷たさと鋭さに恐怖を感じた。彼女と仲良くするのをやめようかとも考えた。だが何を言われても、何をされても変わらない彼女の笑顔が、そんな迷いを消し去ってくれた。

私は苦しみを乗り越えてきた彼女の強さを支えたいと思った。

また、私がアイスクリームを買ったために列に並んでいたときのことだ。順番がきた女の子が、突然携帯電話を操作し始めた。長時間列に並んでいた人々が、その女の子の非常識な行為に苛立ち始めた。だがその女の子が店員に無言で携帯電話の画面を指し示したとき、彼女が聴覚障害であることを理解した。彼女は、注文を文字にして打ち込んでいたのだ。

理解した瞬間の人々のはっとした空気。苛立ちが何か別のものに変わったのを感じた。同情、哀れみ、装った無関心。そのどの感情も、私には理解出来る。だけどそのときの私を感じていたのは、怒りだけだった。障害に対して前向きな感情を抱くことが出来ない人間への怒り、障害者への設備が十分でない社会への怒り。障害ではなく彼女という人間を見つめている人は、誰一人としていなかった。

聴覚障害は外見で判断出来ない。そのために誤解され、怒りや反感をかうこともある。そしてそれは心の障害についても言える。私たちは目には見えない心の辛さを、なかなか理解しあうことが出来ない。それぞれに悩みを抱えているながら、どうして自分の中にあるその辛さを相手の心の中にも見出すことが出来ないのか？自分が辛いから相手の辛さに気付かぬふりをするのではなく、自分も辛いから相手に手を差し伸べることが出来る社会でなくてはならない。その実現のためには障害を困難と考え諦めるのではなく、嘆いても頑張ってもどうにもならないことに立ち向かい、努力し、乗り越えることが必要だ。そして乗り越えたその先に優しさと強さがあることは、パラリンピックの選手が示してくれた。あの輝く笑顔と夢を見つめるまっすぐな瞳は、偏見や差別をなくすはずだと私は信じている。

私の理想の社会。それは誰もが笑い、手を差し伸べあうことが出来る社会だ。実現は難しいと分かっている。だけど、私は諦めない。たくさん失敗し、精一杯努力しながら、強く強く夢の実現へ歩いていきたい。